

反帰省小説としての『帰去来』

—国木田独歩における「連続」と「驚き」—

花 森 重 行

はじめに

ある作家やテキストにとって忘れられるとはどのようなことなのだろうか。例えば忘れることの反対とされる、読み継がれることの場合を見てみよう。現在とは異質の文法構造を有し、全く異なる社会的・思想的背景の下で書かれた古典文学が、現在に生きる人々にも読み継がれているのは、決して無垢な情熱や共感によるのではない。それは古典文学の中に、国民意識の起源や連続性を読み取ろうとする、国民国家の意志と無関係ではないのだ¹⁾。

同様なことは日本近代文学の作家やテキストについても言える。それらのある特定の作家やテキストが読み継がれることは、国語教科書に載ることや、メディアで国民的という賞賛を浴びるなど、国民国家との関わりを抜きにして考えることは出来ない²⁾。つまり日本近代文学は、国民国家の装置としての国民文学³⁾と不可分の関係にあるのだ⁴⁾。その関係は、国民文学的でない作家やテキストが排除されるということにつながっていった。

だが国民国家の中で生み出されるテキストの大半は、国民的想像力の強い支配下で産出されるものであった。そのことは、国民文学的でない要素であっても、国民文学的な要素と密接に絡み合う形でしか提出されえないことを示している。全てのテキストは国民文学的でない要素をも持ち合わせているということもできるのである。

あるテキストが国民文学的と規定されてしまうのは、国民文学の系譜をテキストの中に意識的・無意識的に読み解こうとする傾向の強い文学批評・文学研究によってであった⁵⁾。それらによって、国民文学的な要素と絡み合う形で提出されていた、テキスト内の国民文学的でない要素は不可視のものとしていった。つまり、テキスト内において必ず存在し

た、両者の抗争が織り成す重層性は、無かったものとされてしまうのである。

その排除や不可視化は、具体的には文壇における批評や、文学全集における収録作品の選別、著作集・全集の編集を通じて行われてきた。そして、それらの選別を確定的なものにするとともに、選別を行う主体を生み出したのが、関東大震災後の円本ブームにおける作家とテキストの選別と、その選別されたものを対象とする日本近代文学研究の形成⁶⁾であった。この歴史的な経過を経ることで、数多くのものが忘れられていった。このように、忘れられることも国民国家と不可分の関係にあるのである。

国木田独歩（1871～1908）も、読み継ぎ／忘却の抗争の中に置かれた作家であった。独歩は死の直前に「自然主義の先駆者」という肩書きを付され、関東大震災後の円本ブームの中でのテキストの選別を通じて、国民文学者のリストに名を連ねられてきた。それは一面では独歩を流行作家にしたが、独歩の数多くのテキストは忘れ去られるか、ある特定の読みが強制されることとなった。独歩のテキストにおいても、重層性は忘れられてきたのである。

本稿ではこのような経過を経て忘れられてきた独歩のテキストのひとつである、『帰去来』（『新小説』6年5巻 1901・5・1）への再検討を通じて、そのテキストを忘れさせた力の解明と、不可視のものとしてきたテキスト内の重層性を再発見していきたい。

1871年に生まれた独歩が死の前年である1907年に、

「〔武蔵野〕〔独歩集〕〔運命〕〔涛声〕—引用者）所載の数十篇中最近の短文を除くの外は、悉く明治三十年頃より三十六年末までの作で、僕は三十七年からは殆ど小説を書かないと言っても宜しい」（『余と自然主義』上）⁷⁾

と述べているように、彼が詩・小説・評論・日記等のテキストの大半を発表したのは1893～1908年の間である。この時期は、国民化の進展と植民地獲得という意味で、近代日本の転換期として捉えられている1890～1910年代とほぼ重なる⁹⁾。

日本列島における国民国家の草創期に生まれ、1910年の韓国併合の2年前に死んだ独歩にとって、国民化や植民地獲得の問題は不断に自らに迫るものであった。独歩のテキストの多くは、その2つ問題との共存と葛藤無しには生まれえないものであったのである。独歩を人気のある国民文学者としたのも、テキストの大半が忘れられたのも、それらの問題との関係に基づいているのである。そのような独歩の葛藤の中から生まれた、『帰去来』というテキストの、内なる絡み合いを再発見することを通じて、それを読むことの可能性を考えていきたい。

I 帰省小説概念の政治性

国木田独歩は、自らが文壇の提供する枠組の中に閉じ込められることに抵抗した作家であった。独歩は自分を自然主義という枠に組み込むこもうとする批評家達に対して、「僕は何主義でもない」「僕は文藝上の主義などを論ずるのは厭やだ」⁹⁾と言い、「独歩は独歩である」¹⁰⁾と自らを規定した。また自らが文学者であるのも「世間が自分を小説家であると、定めて」¹¹⁾いるためであるとして、自らを文学者として見ることに對して一定の距離を持つとした。

その独歩のテキストを、文学と非文学に分け、文学テキストを主要な分析の対象として、「ロマン主義から自然主義へ」「自然主義の先駆者」などの分類の中に位置付ける旧来の日本文学研究は、独歩が嫌った枠組を暗黙の前提としていると言えよう。例えばその中では、独歩の日清戦争の従軍記事集『愛弟通信』（出版は1908）は非常に微妙な位置に立たされてきた。従軍記者体験は当時の文学者に広く共通した経験であったにもかかわらず、それは独歩の小説とは直接関係無いものとして扱われるか、「近代初期の戦争文学」¹²⁾という形で文学テキストに取り込まれるしかなかったのだ。

一方、それら文学史的分類に基づく日本文学研究を徹底的に批判したのが柄谷行人であった。柄谷は、日本文学研究が近代の制度である「日本近代文学」の政治性を隠蔽してきたことを指摘する。その上で柄谷は独歩のテキストを、国民の創出を可能にし、国民以外の「他者」を拒む近代文学－国民文学の祖として考えていく¹³⁾。この研究はそれまで無垢な作家の内面の反映とされていた独歩のテキストを、国民国家の政治関係の中で考えるものであったということが出来る。それは独歩のテキストを、作家の内面というものを越えた、より広い関係性の中で考えることを可能にするという意味で画期的なものであった。しかしそれは、独歩を国民文学の創出に寄与した人物とのみ考えることで、独歩とそのテキストの重層性を見落とすという問題点をも有していた。つまり、「国民文学者」独歩の中においても生まれえたかもしれない国民国家への抵抗の契機を、柄谷は見逃しているのである。

柄谷の指摘する独歩テキストの政治性は否定できない。例えばそれは、柄谷の議論を受け継いだ渡部直己によって指摘されている。渡部は小民史と総称される独歩のテキストの、「異質なもの、非常なるもの、驚くべきもの」としての“被差別民”を、文明に象徴する「我々」＝「日本人」の正統性・均質性を補完する未開として描写するという政治性を指摘する¹⁴⁾。

しかしその独歩とそのテキストの政治性は、柄谷が「彼がはじめて新たな地平に立った」と言いきるようには確かなものでもなかった。「武蔵野」（『国民之友』3巻365・6号 1898・1・10、2・10）で友人とともに小金井付近の「夏の郊外の散歩」を楽しみに来た主人公に対して、「今時分、何しに来ただァ」「桜は春咲くこと知らねえだね」（2巻78頁）と受け答える「掛茶屋の婆さん」の「積極的な抵抗」が、いかに主人公の近代的自然観を揺さぶっているかを柄谷等の議論は説明できないのではないだろうか。

確かにこの婆さんは、近代的なものの象徴である主人公と対比的に扱われており、その確かさを保証する他者であるのかもしれない¹⁵⁾。だが婆さん自身は、近世以来の桜の名所¹⁶⁾である桜橋で、掛茶屋という近世的ネットワークの拠点¹⁷⁾で、往来する

客や軍人を休憩させることで生計を立てているのである。このことは何を意味するのだろうか。

当時花見客の交通手段は徒歩から甲武鉄道等へ変化していた。それは婆さんの生計が鉄道に左右されるようになったとともに、甲武鉄道自体が花見客を収益の柱としてしているというように¹⁹⁾、婆さん自身が鉄道の生計を左右していたことを示す。つまり婆さんが鉄道や軍隊などの近代の装置を間接的に利用して自らを能動的に変化させようとしていたといえるのではないだろうか。この意味で婆さんは、作者の視点に晒される受動的な対象ではなく、積極的に見返す能動的な存在でもあるのだ。

結局は婆さんの風景観の説得に失敗した主人公は、

「元来日本人はこれまで檜の類の落葉林の美を余り知らなかった」「自分も西国に人となって少年の時学生として初て東京に上がってから十年になるが、かかる落葉林（武蔵野の林－引用者）の美を解するに至るのは近來のこと」（2巻69頁）

と、相対的な自然観しか持てないことを告白した上で、武蔵野に近代的な風景を探し出そうとするのである。独歩自身も、様々な人々の「積極的な抵抗」との葛藤の中でテキストを書いたのであり、その葛藤の間にあるものとしてテキストを読むことが、「独歩は独歩である」という読みなのではないだろうか。

このとき、『帰去来』はどのように読まれるべきなのだろうか。もともとは、「あの自分』『帰去来』『別天地』『二少女』などは、独歩氏の作としては大いにい方である」¹⁹⁾、「長さに比して深さは浅い。別に新しいところもない」²⁰⁾と僅かに技術上の評価が行われたが、それ以上に展開されることはなかった。

その『帰去来』を、本格的な研究の俎上に載せたのが帰省小説という枠組である。帰省小説とは宮崎湖處子『帰省』（1890）を祖とする、「大都会に遊学中の青年が故郷に帰省することを素材にした小説」²¹⁾であり、東京に出てきた地方出身者が帰郷をめぐる「土着と近代の矛盾のはざま」²²⁾で苦悩する物語であるとされる。同時代の中では、殆ど話題にされ

ることもなかった『帰去来』を再発見させたのが、帰省小説という枠組であったのだ。

だが独歩と年代代の文壇の中での、それに対する批評と、帰省小説研究によるそれへの研究がともに、上京した地方出身の主人公の帰郷のみを唯一の移動としている共通点は奇妙に映る。地方から出てきた人が移動するのが、必ずしも故郷である必要はないと考えられるのである。例えば同時代の『帰去来』評では、「男は憤慨して故郷を去り」（10巻398頁）と、自然な行動として帰郷先からの東京への帰還が語られている。一方、帰省小説研究は、主人公を故郷へ帰り、しかる後棄郷する存在とみていた。

だが帰郷のみを、上京した主人公にとっての唯一の移動先とすることは、現実の独歩の移動やその世界像と必ずしも一致しない。例えば独歩自身は、

「小生をして追懐録を草せめば三部の別種にして而も詩趣に富めること相譲らざる製作出来上がるべし。第一、は『若き田舎教師』という題目にて豊後の一旧城下における一年間の僕の遇逢観察を書かしめよ。第二、は『従軍記者』という題の下に余が乗艦観察の五ヶ月餘の見聞を書かしめよ。第三、は『わかき血』とか何とか題して恋愛の始終を書かしめよ。此三つの者は悉く連続せり（傍線－引用者）」（1897年1月31日の田山録弥（花袋）宛書簡 5巻416頁）

と述べている。これは、「追懐録」＝自伝的回想録を記すならば、それは日本列島内の地方での経験を書いたテキスト、朝鮮・中国という従軍時の「見聞」のテキスト、東京における自身の恋愛の様子を描いたテキストの三つによって構成されるものとなることを示唆している。しかもそれらは「別種」でありながら「悉く連続」する、と主張されていたのである。このことは独歩にとって地方と朝鮮・中国、東京での経験は、区分されるものでありながら「連続」していることを示すものであった。それは後に地方小説、『愛弟通信』に代表される海外従軍記事集、様々な恋愛小説として結実するテキスト群が「連続」していることも示している。つまり独歩の中においては、文学－非文学の差や、地方・中央・日本列島外という対象の差を越えてテキストが「連続」しているのである。

独歩の中におけるこれらの「連続」を、「別種」

の経験をあくまでも個人の中の一貫した経験に変換させ、その他者性を減少させようとする、近代の「内面」²³⁾の政治性が顕著に現われたものということもできるだろう。だがその変換は、「別種」のものが存在する世界との出会い＝「連続」がもたらす揺らぎに対抗する形で行われるものである。その意味で独歩自身が「連続」の中にいることは確かなことであった。

だが同時に独歩は湖処子の『帰省』を出版直後から愛読し、1891年に学校を退学したのを機に故郷への帰郷定住を試みている。これは独歩が「田家文学とは何ぞ」（『青年文学』13号 1892.11.15）で賞賛した『帰省』の熱心な読者であり、その影響下で帰郷定住を試みた多くの男子青年の一人であったことを示すものだろう。ここでの独歩は、帰郷こそが唯一の移動の選択肢であることを主張してやまない。つまり独歩の移動には、より広い世界との連結を拒否する一面もあったのである。

帰省小説研究においても、『帰去来』の峯雄も、次々とハワイへ出稼ぎに行く郷里の若者達のこと～朝鮮貿易に従事するために、一島の住民の七分が朝鮮に移住した麻利府村の馬島のことをしている。彼の郷里も近代化の波にあらわれ大変貌を遂げつつあるのである」と、外部の存在が指摘されている。しかしそれも、「ただこの認識が、峯雄の故郷認識に何程の影響を与えているかは不明である」と、故郷の外部の影響を「近代化の波」という抽象的なものにするので、その影響を分析の対象から外してしまう²⁴⁾。そこでは、独歩の移動に対する認識の二重性は、見落とされている。だが『帰去来』を読む場合、朝鮮や中国、ハワイなどの地域と日本列島内の地方との結びつきを見ることは不可欠のことなのである。

私はこのテキストを、「連続」の中の世界で、様々な人々の「積極的な抵抗」との葛藤の中で書かれたものとして見ていきたい。それは帰省小説研究から見落されるものを再発見していくことでもあるだろう。

Ⅱ 帰省小説の非「連続」性

ここでは先ず、『帰去来』を帰省小説との視点から見てみよう。それは遊学のため上京しそのまま東京で就職した26歳の青年吉岡峯雄が、故郷での田園生活にあこがれ、山口県に比定される故郷の親しい家の娘との結婚のめどをたてるために帰郷するが、変化する故郷を経験する中で定住を決意、しかし娘の死により東京に戻る物語と要約できるだろう。だがこの要約は、故郷を支える要素としてのハワイや朝鮮などの外部を捨象するという問題点を有している。ここでは、この外部の消去を生み出す要素を明らかにした上で、独歩とそのテキストがどのように外部と結びついているかを見ていきたい。

『帰去来』は主人公吉岡峯雄とその母との会話で始まる。墓参のためと偽って帰郷しようとする峯雄が、「それなら私も」と共に帰郷しようとする母に「一昨年もおりになってまた？」（2巻315頁）とその希望を取り下げさせる冒頭の会話からは、既に父はなく、主人公を中心とする家族が東京に住んでいることを窺わせる²⁵⁾。つまり峯雄達は故郷から東京へと移住しているのである。

その東京に住む峯雄にとっての故郷は、「この長閑な、豊かな、冬寒からず夏暑からず、四時の風光に富み、天の祝福を十二分に受ける村落」（2巻327頁）というユートピア的な風景であった。しかも「己は確に今わが故郷に帰りつゝあるのである」（2巻317頁）という実感は、鉄道で東京から離れつつある時の、「あゝ此香だ。此香だ。」という田舎の「香」と、東京の「香」を保持する列車内の空気との対比の中で確かなものとされるのである。

『帰去来』が帰省小説の範疇に入るのは、上京遊学した主人公が美しい故郷へ帰省し、その故郷＝田舎と都会の対立を物語の中心としているためであったとされる²⁶⁾。帰省小説の祖としての『帰省』自体が、故郷を土着＝未開、東京を近代＝文明として描き出したものであった²⁷⁾。その系譜を引く『帰去来』のあらすじや対立軸が『帰省』に似ているのは、当然とも思える。

だが『帰省』の風景は「実は現実のそれではなく～現実の故郷を純化浄化して、ロマンチックな人間、

山河、村落と田園的舞台」として、意図的に描き出されたものであった²⁹。そして、そのように描き出されたことこそが、『帰省』のもつイデオロギー性であったのだ。

『帰省』に影響を与えた「故郷」（国民之友『国民之友』84号 1890・5・30）などの徳富蘇峰の諸論文が故郷意識と国民意識の形成に関連するとされるように³⁰、帰省小説も同時代における国民化の地方への浸透と関係していたのである。

明治新政府は早くから地方を、人的・物的な資源の収奪対象として支配の基盤にしようとしてきた。この試みは1888年の市制町村制と1890年の府県制郡制の制定を契機として、1900年ごろに一応の完成を見たとされる日本の地方自治制度の進展³⁰に伴い強化された。その状況は、地方を中央から伸びる支配の網の目の中により強固に統合しようとする³¹という地方再編と教育再編を不可欠のものとした。そしてそれらは、支配統合のかなめとして、中央で教育を受けた人材が地方へ行くことを必要としていった。

蘇峰自身が「地方代議士と地方人民」（『国民之友』20 1888・4・20）や、「市町村の基本財源」（同51 1889・5・22）などで地方制度の改編について、「故郷」とほぼ同時期に論じている。このことから考えれば、1890年前後に蘇峰・湖處子が「故郷」などの諸論文と『帰省』とで青年に故郷や地方へ向かうことを奨励し、かつその姿を美しいものとして描こうとしたことは、同時期の地方・教育再編に伴う人材の投入を思想的に擁護するものであったといえるだろう。帰省小説研究は、この帰省小説のイデオロギー性に対して無自覚であったのだ。

『帰去来』において「二日前には東京に居て足を爪立て「将来」をめがけて駆け足をして居たのが、今は故郷の丘に帰って、松の根にどつかつ尻を下ろして居る」（2巻325頁）と、東京と故郷との対比が執拗に繰り返されるのも、この作品がそうしたイデオロギー性の系譜と無縁でないことを示している。

しかしこのユートピア的な故郷の風景は決して東京と対比される中でだけ生まれてくるものではない。例えば独歩にも強い影響を与え、ユートピア的

な故郷像の基盤を提供した、蘇峰の「故郷」は、故郷を海外に求めて日本の対外拡大の先兵となることを主張する「日本人種の新故郷」（『国民之友』85号 1890・6・13）とほぼ同時に提出されている。このことは、故郷の風景の創出はもっと広い関係性の中で考察されなければならないことを示唆する。

『帰去来』においても楽園としての故郷の風景への言及は、帰郷中の電車の中での海軍大佐との会話の後に、

「二十七年の秋の初、広島の本営詰で（戦場に一引用者）派遣された時（中略）あの時は高山に登りながら一足一足と眼界が広がるよう（中略）今夜は（中略）穏やかな楽しい湊（故郷一引用者）が自分をまってるようである。」（2巻320頁）

という、かつて従軍記者時代の峯雄が戦場に向かう時に見た風景の回想と対比される形で、「穏やかな楽しい湊」として初めて提示されているのである。峯雄にとって故郷の風景は戦場での経験を経ることで再発見されるものであったのだ。

峯雄にとっては故郷の再発見をもたらした戦争体験は独歩においても、

「二十八年一月元旦吾が千代田艦長崎港に向て、大連湾を發したり。四日午後二時頃長崎に着しぬ。殺風景極まる大連湾より帰りて長崎港に入るや、山は青く水は清く、今更らの如くに『日本風景論』を成る程と思いたり」（『千代田艦の偵察』『愛弟通信』5巻100頁）

と、外部（中国）の静態的な風景と対照する形で美しい日本の風景を発見することを可能にするものであった。また故郷の比喩として使われている「穏やかな港」（『穏やかな楽しい湊』、「故郷は一番穏やかな港ですよ」（2巻324頁））を、『愛弟通信』の「長崎港」と対比すると、『帰去来』の故郷は美しい日本の風景の代表としても見られている、ともいうことができるだろう。

しかし独歩にとって故郷の発見をもたらした戦争体験は、戦場である朝鮮半島への認識を深める経験でもあった。6歳から16歳までを山口県で過ごした独歩にとっても、朝鮮半島がその視野に入ってきたのはそう早いことではなかった。1891年に『帰

省」の影響を受けて帰郷定住を試みたときにも、

「此日、横道乙熊（ようやく十四五歳）商業見習の爲め、明後日より朝鮮に航すとて、いとま乞いに來らる、朝鮮と聞けば、その道のりはもとより東京に行くより余程近きも、何となく妙な感あり」（『明治廿四年日記』六月二十六日 5巻205頁）

と、あくまでも朝鮮との地理的な近さや、地方と朝鮮半島との交流の存在は、「妙な感」以上のものではなかった。その独歩に朝鮮半島への認識を深めさせたのは日清戦争であった。「朝鮮の内乱、清国の出兵、吾国民の激昂」（『欺かざるの記』1894・6・14 7巻143頁）などの朝鮮半島の問題に意識的になっていった。1894年に従軍記者となり軍艦千代田に乗船することとなった独歩は、先に見たように外部の風景と対照しながら日本の風景を発見している。戦争という敵=非自国民・味方=自国民に世界を峻別することを通じて、日本の風景を認識しようとすることは、柄谷のいう外部からの国民共同体の風景の発見に結びつくものだったことは確かであろう。

そして独歩や峯雄の経験した従軍記者が、「われわれ」（日本人）と「彼ら」（中国人・朝鮮人・アイヌ・病人・貧民・娼婦・下層労働者等々）を差別化する言説³²⁾を前提とする「大文字の「文学」」³³⁾の成立に果たした役割を考える時、『帰去来』における美しい故郷の風景の称揚は、病人、貧民、娼婦、下層労働者の住む病院やスラムを持つ東京、中国人や朝鮮人などの「「彼ら」を差別化する言説」の提示とセットとなっていたものでもあったのである。

だがその国民共同体の風景の発見をもたらす戦争は、より多くの他者との接触の場を与えるものでもあった。独歩自身が、

「上陸して民家に至りぬ。（中略）戯れに豚一頭、家鶏二羽及び婦人用の靴二足を掠めて帰艦す」（『欺かざるの記』1894・10・29 7巻242頁）

と、朝鮮半島で略奪に参加したことを告白・反省しているが、それは認識のレベルだけではなく、それまで「妙な感」でしかなかった朝鮮半島などの外部をより近い存在とする経験であった。

このように戦争体験を含む独歩の移動の体験は、

国民共同体の風景の発見をもたらすとともに、より多様な他者との出会いによってそれを揺るがす契機をもたらすものでもあったのだ。そしてこの2つの要素は、独歩自身のテキストにおいても絡み合いながら提示されていた。

例えば独歩は数多くの戦争に関する小説を書いている。それは直接戦場を描くものとしては、海軍士官になった主人公が少年時代に別れ、後に船員になった友人と大連湾上の徴用船の上で再開するという「馬上の友」（『青年界』2巻6号 1903・5・1）を代表的なものとしていた。

また直接に戦場の描写はなくとも、間接的に戦争の影響を描く小説も多数存在する。「若いものの邊に消えて無くなる、此頃（日清戦争時-引用者）は其幾人というを知らず大概は軍夫と定まり来れば」（2巻284頁）と、日清戦争に刺激され海を渡る軍夫を描く、「置土産」（『太陽』6巻15号 1901・12・1）などのテキストである。更には「此の二人の女というは、傍で聞く処に依ると仙台師団の兵卒の妻らしく、夫が台湾に行くを送って、そして今故郷へ帰る途らしく」（2巻237頁）と、戦争によって獲得された植民地へ派遣される兵士たちとその家族が登場する「関山越」（『中学世界』3巻7号 1900・6・5）などであった。

日露戦争当時の独歩は、『戦時画報』（1904～5）という雑誌の編集長として、戦意高揚に努めていた。このことから考えると、独歩の小説内の戦争の描写は、「戦争という国家的規模の出来事によって、同じ境遇であるかのような共同意識をもちうるような状況」³⁴⁾としての戦争の語りを客観的に描写しただけのものではなかった。それは、その描写を含む小説が読まれることを通じて、小説内の戦争体験に読者が同一化することにより、多様な読者の間に共同意識を創り出す効果があったと思われる。

『帰去来』の戦場に関する回想の描写にも、同様に共同意識を生み出す効果があった。それでの戦場の回想は、日本の軍人・民間人、田舎人・都会人、外国人（「西洋人」）という様々な人々が乗り合わせている電車の中で行われている。この多様な人々のいる場で戦場の話が語られることは、その会話を通じて自国民と他国民の選別することを通じての共同

意識が形成される行為であるとともに、その読者に共同意識を与えるものでもあった。特に『帰去来』の場合には戦争描写を通じて、他国民と識別される自国民意識が形成される国民意識の下位概念としての故郷意識の形成と関連しているというべきであろう³⁶⁾。

この描写は、「社会人事殆んどポリチックならざるはなきを悟りぬ、所謂政治のみがポリチックに非ず、宗教も教育も文学も」（『欺かざるの記』1893・4・10 6巻95頁）と、文学を名も無き小民を包摂した完全な「人類の歴史」としての国民史を形成するための政治的行為としようとした、日清戦争前の独歩の意図を受け継ぐものであった。それは自らが代表する日本人の優秀さに比べて「支那人の今更ら意気地のないのを感じた」³⁶⁾という差別的言説をも生み出すものであった。

その意図が、実際に地方の描写に適用される場合は、「今より六七年前、私は或る地方に英語と数学の教師を為て居たことが御座います」という文明的な東京から来た教師と、「生白い丸顔の、眼のぎょろりとした」とされる未開的な「白痴」の少年を対比させる「春の鳥」（『女学世界』4巻4号 1904・3・15 3巻393頁）の、近代の視点による未開の露骨な構造化にも繋がっていった。

しかしこのような視点は、「捕虜」における中国人に対しての蔑視が、「失敬だが君の国（日本－引用者）でももし支那人同様になつたら」というロシア人将校の反論によって相対化されるように、常に揺らぎの契機をも有していたのだ。

以上に示された認識の転換とテキストの重層化を独歩に強いた移動の経験は、独歩自身に特有なものであったということは出来ない。何故ならこの時期は日清・日露戦争、台湾や朝鮮などの植民地獲得、日本列島内の商工業の発展と、鉄道・航路などの交通手段の発展により、人々の移動が増加し複雑化した時代であったからである。その中で人々は、本土内の移動と本土外への移動が接続するという、近世に比べより長距離で複雑な移動を経験することになっていったのである。

例えば東京で高等教育を受けた地方出身者には植民地と地方、東京が官僚やエリート会社員の赴任先

となり、地方の地主には新たな投資対象として朝鮮などの植民地が現われる。それに対して、小作人化した農民には、炭坑や紡績工場・東京等の本土内の都市以外の、新たな移住先として朝鮮が存在し始め、貧しい農民の娘達には従来の出稼ぎ先に朝鮮や満州、東南アジアが加わった。そして朝鮮に向かう兵士や植民者と同じ道を通して「からゆきさん」は朝鮮に向かう。さまざまな階層性のある移動が交錯する中でしか地域や人々は存在できなくなったのである。独歩の移動もその時代を代表するものということができるだろう。

この移動の時代に生きた独歩が描いた『帰去来』の中で、帰省小説性が生み出すユートピアとしての故郷像への揺らぎの契機が示されるのは、その故郷像の強調と前後して現われる移民の増加と朝鮮の影への峯雄の「驚き」の反応であった。それは具体的には、どのように現われるのだろうか。

Ⅲ 『帰去来』における「抵抗」と「驚き」

峯雄は故郷に入り、そのユートピア的な風景を確認する。しかしそこで峯雄は二つの「驚く」事態にも遭遇する。この「驚き」の箇所は、『帰去来』のもつ帰省小説性を揺るがす契機となるものであった。ではこの差異をもたらし「驚き」とは具体的には何であったのか。

「渠（独歩－引用者）は常に「驚きたい」と云って居た。」「実行家にして芸術家であった渠は偏へに実行家たらんとして失敗し。失望し疲労した。而してなお「驚きたい驚きたい」と云っていた。感覚の常に新ならざるを憂いた。」（田山花袋「国木田独歩論」〔早稲田文学〕33号 1908・8・1 10巻409・411頁）

と田山花袋が評するように、独歩の探求の動機になったのは「驚き」であった。それに基づく探求は、外部のもつ他者性を未開的なものとして提示することで、自国民の均質性・同一性を証明するものとして他者を利用する一面をもっていた。しかしその過程は能動的な他者との葛藤・交錯の中で行われるものでもあった。

S・グリーンブラッドはヨーロッパによるインデ

イオの表象を、揺るぎ無い前者による後者の一方的な描写ではなく、多様な両者の間の葛藤として読もうとする³⁷⁾。これを受けつつ本稿では、絶えず揺らいでいる峯雄と、多様な人々との葛藤・交錯の痕跡として、『帰去来』の「驚き」の箇所を読み解いてみたい。

峯雄が故郷の中の外部への「驚き」を示すのは、故郷におけるハワイ移民の流行を聞く箇所と朝鮮からの来客の報を受ける箇所である。

先ずハワイ移民の流行を聞いた峯雄は、

「徳三は達者かね。」(中略)「徳三はこの春から布哇に行きました。」「そうか」自分は驚いた。「菊蔵も行きました。」「そうか。」「私も行こうかと思て居ります。』」

「布哇出稼! これが我が故郷の流行の一つとは兼ねて知て居たが、斯くまで村の若者相率いてゾロゾロと出て行くほどには思わなかった。中には布哇から直ぐ帰らないで亜米利加のはまで流れ行き、そのまま消えて了うものもある。(傍線-引用者)」(2巻326~327頁)

と、明確に「驚き」を示す。峯雄は既に知識としてハワイ移民の流行を知っているのだが、それが自らの故郷にまで確実に拡大していることに驚いていることを示す。このことはハワイ移民というという新しい事態を通じて、ハワイという場所が提示されることで、純朴なユートピアの住人であるべき人々が、移民という形で積極的に外部と交流し、移民を希望する中で自らの想像力のなかでの世界像を拡大させていることに驚いているといえるだろう。このように、移民の増加は、外部との関係を捨象しようとする峯雄の帰省小説的視点をつまづかせるものであったのだ。

独歩のハワイ移民や南米移民に対する関心は既に「家庭小話」の「其六 布哇出稼」(『家庭雑誌』1893・6・15)に「源二は布哇出稼を思い立ちぬ〜断然実行することを思い定めぬ」「其より亜米利加に四五年も稼ば、千円の金を懐にして帰るは夢よりたしかならん」(1巻224~5頁)と現われる。また「非凡なる凡人」(『中学世界』6巻3号 1903・3・5)には「父の山気を露骨に受けついで、正作の兄は十六才の歳に家を飛び出し音信不通、行方知れずになって了った。布哇へ行ったとも言い、南米に行った

とも噂させられたが、実際のことは誰も知らなかった」(3巻133頁)と記されている。それらにおいては移民は具体的な場所に依拠してはいなかった。しかし『帰去来』において移民は地方のある場所に密接したものとして現れている。特定の場所に根ざしたものとしてハワイ移民の流行が現れてくるため、それはより強い「驚き」として表現されている。

峯雄は「『世界を家となす!』結構な話である」として、「非凡なる凡人」的な視点で立志冒険的な移民を侮蔑的に述べ、「その故郷に於て確実なる生活、限りなき平和」を送るべきだと考えている。しかしそれは東京に住む自らをも「我も亦た其(放浪する移民-引用者)一人ではないか、布哇と東京と何の撰ぶ処ぞ」(2巻327頁)という疑念をも生み出すものであった。その疑念の深さは、拍子木が「激しく、そして急に」鳴るまで峯雄を不安定な状態に陥れるものであった。

結局東京という日本列島内との比較が持ち出されることで、移民の増加がもたらす外部性は薄められ、この場ではユートピアへの帰郷が優先させられる。しかしこの疑念は消すことはできない。「騒々しい現から静かな夢の世界」(2巻325頁)という対比で示されたそれ以前における故郷の風景の確かさは決して回復されないのである。

この疑念を持ちつづけながらの峯雄に訪れるのが、朝鮮からの来客の報である。それに対して峯雄は朝鮮という外部からの訪問者には「少し驚いた」だけである。何故なら、

「小川は朝鮮貿易を主なる業とし、朝鮮釜山には多くの知人、のみならず親族すらある家ではないか。殊に麻利府村の者は沢山釜山に移住して居る。朝鮮貿易をするものは小川の外、麻利府には猶お四五軒あって、皆な五十屯、七十屯、乃至九十屯までの合子船を四五艘も持って居るのである。「朝鮮」の語は麻利府では少しも外国らしく響かない、東京大阪というよりもいまだしく近しく思われて居るのである。且つ同村の内に編入して有る馬島、麻利府の岸から数丁を隔つる一小島の住民の七部は己に釜山仁川等に住居して、今は空家に留守居のみ住んで居る次第である。」(2巻329頁)

という、貿易のような朝鮮に行き来する道の恒常性

が認識されていたからである。この時、峯雄が従軍記者として朝鮮に渡った時の経験と、朝鮮貿易への像は結びついていない。つまり朝鮮はあくまでより身近な移民先・商売先としてのみイメージされ、彼が経験した具体的な戦場の光景とは交錯しないのである。峯雄の想像力が朝鮮を地政学的なものとしてのみ思考する一種のオリエンタリズムに捕らわれているのは確かであろう。朝鮮は身近な移民先・商売先とされることで、ユートピア的な故郷像との安定的な並存が可能な場所とされているのである。その限りにおいて、たとえ峯雄が移民の増加から疑念を抱きつつも、その故郷像は存在しつづけることは可能なのである。

だが移民の増加と朝鮮からの客がもたらす不安は峯雄に『ラセラス伝』（1759）を紐解かせ、そこから故郷への定住の意志を一層固めさせる記述を引き出してこなければならなかった。東京で、「今度は二人連れで上京するという趣向かね」という同郷の友人前田に尋ねられる箇所では、妻を連れて上京することが暗に示されていた。帰郷定住は試みの中に入っただけで、明確には示されてはいなかったのである。より明確な形でそれが強調されるのは、この二つの不安を打ち消すためでもあったのだ。かつその部分で結婚が付随しているように、あくまでそれはヒロインの存在を不可欠とするものであった。

この時強調された峯雄の理想の故郷像は、揺るぎない共同体というイメージをもっていた。それを支える要素としては、①外部との関係は有するが閉鎖的な環境と、②純朴な住人、そして③ヒロインの存在、によってなりたっていたといえるだろう。峯雄は「驚き」によるこれらの要素の揺らぎを経ることで、より純化されたユートピア的な故郷の風景を思い描かざるをえなかったのだ。

このイメージは峯雄の読んでいた『ラセラス伝』で示されたものであるとともに、それに影響を受けた『帰省』においても示されるものであった³⁶⁾。『帰省』においてユートピア的な故郷のイメージが可能であったのは、故郷の外部との関係があくまで都市への出稼ぎでしかなかったことによる。この閉鎖的環境が、東京から帰ってきた主人公に対する母系的な村人のよそよそしい視線と、東京という文明

から得た新知識をもつ主人公への強い興味という両義的な反応をもたらしている³⁷⁾。もちろんヒロインの存在は当然のものとされていた。『帰省』においては先述の3要素が、揺らぎを持ちつつも存在していたのである。

しかし『帰去来』においては人々の峯雄に対する視線は決してよそよそしくない。それは登場人物が全て親族かそれに近い存在であるということと共に、廻船貿易の伝統やハワイ移民・朝鮮への移住にみられるように、人々は自らが移動することで新知識を得ていることによる。その住人は、東京から新知識を持ってくる人へ積極的に話を聞きに行くようには描かれていないのだ。

このように『帰去来』においては、故郷イメージを支える3つの要素のうち2つが既に崩れていた。その峯雄にとって理想としての故郷を支える最後の存在がヒロインの存在であったのだ。柳田国男は『帰省』を、「故郷」という「あの時代の若いものの考えの、代表的に表わされたもの」と評し、特に「『帰省』と言う本は、理想の細君をもらおうというだけのことを書いたもの」³⁸⁾と述べている。つまり故郷像の形成にはヒロインの存在が不可欠のものとされていたのである。このことは、逆に「理想の細君をもらおう」という要素が理想の故郷像とともに提示されている限り、峯雄にとっての故郷の風景は存続可能であり続けることを意味している。それを主人公が思いを寄せる“綾さん”の死という形で不可能にし、その風景を最終的に揺るがすのは、朝鮮での婚礼のための綾さんの渡航計画と、主人の娘に思いを寄せる孤児出身の使用人五郎の行為の結びつきであった。

峯雄に「理想の細君」の候補たるべき“綾さん”の婚約を知らせるのが五郎であった。峯雄にとって五郎とは、「自分は能く五郎を知って居る。彼は天性正直な男である。併し～極めて片意地な頑固な性質の男になっている」（2巻347頁）と、暴れものでありながらも、小川家に仕える純朴な孤児出身の下男であった。

しかし綾さんに密かに思いを寄せる五郎にとって、婚約という事実は耐えがたいものであり、それが五郎の行動をよりエスカレートさせていた。純朴

さからかけ離れてしまっていた五郎から知らされた、婚約と朝鮮渡航の情報は、峯雄を故郷から一時退去させるほどの「驚き」をもたらすものであった⁴¹⁾。

そのような孤児が、峯雄の故郷像における共同体的な村落の中での正式な成員となるためには、例えば「少年の悲哀」(『小天地』第2巻11号 1902・8・10)で娼婦とその弟に似た少年を引き合わせる孤児出身の使用人徳二郎が、「その後徳二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓」(2巻483頁)になったように、「立派な百姓」になることが必要であった。さもなくば、「今日では主人と同船して航海することもあり」(2巻327頁)と、朝鮮貿易の船に同船した経験のある五郎は朝鮮へ渡り、高浜虚子「朝鮮」(1912)に描かれる人々⁴²⁾のように“雑業層”となるか、東京などの都市へと移住するしかなかったかもしれない。また五郎が“綾さん”を連れて逃げるとしたら、朝鮮はその候補の一つであっただろう。

峯雄に「驚き」をもたらすという点では“綾さん”も同様であった。山口を舞台とする独歩の「少年の悲哀」に朝鮮に売られていく娼婦が描かれているように、当時は数多くの女性が「からゆきさん」として売られていった。在朝日本人社会における男女数の不均衡⁴³⁾は社会維持のため本土からの嫁と海外出稼ぎ娼婦を必然のものとした。そして『帰去来』「少年の悲哀」の舞台である山口県はその供給地として重要な役割を果たしていたのである。朝鮮貿易という父の商売をより拡大するためには、“綾さん”はその不均衡の「犠牲」として朝鮮に渡らなければならなかったのであった。

その渡航をいやいやながらも了承したことは、「柔和な気質、能く事に耐え忍ぶ力、如何なる場合にも怒りの色を顔に現わすことなき温順な心」(2巻347頁)をもって自らのもとに嫁に来るということを当然と考えていた峯雄にとって「驚き」であった。

“綾さん”の実際の死因は明らかではない。五郎による故意の殺人であることは強調されるが、事故であるのか五郎による無理心中であるのかは明らかにされない。しかし五郎が徳二郎の取った方向を取らず、共同体から忌避の対象とされたまま、ユート

ピア的な故郷-地方像の形成に不可欠な「理想の細君」である“綾さん”の死に関わったのは確かなことであった。つまり“綾さん”の朝鮮渡航の問題が、共同体の純朴な住人とみられていた五郎を其処にそぐわない存在に変化させ、最後には渡航前日における2人の死をもたらすというものであった。ヒロインの死により、ユートピア性を支える最後の要素が崩壊したのである。それは貿易相手として恒常的で、故郷と安定的に併存可能な存在であった朝鮮を、より他者性の強い存在へ変化させるものであった。

そして、安定的でユートピア的な故郷像を支える安全な外部としての朝鮮の変容は、峯雄の故郷像をも決定的に変容させる。結局朝鮮の日本人商店の使いは帰っていくが、それは貿易が途絶することを示すものではない。既にその結びつきは不可分のものとなっているのである。「理想の細君」=ヒロインの死をめぐって転換した峯雄の故郷は、「悲痛」を抱かずに考えることも出来ない場所となり、当然峯雄の理想とするような風景は描かれなくなる。「不羈、独立、自由! 人は此地上において其十分を共有すべき約束を持って居ない」(2巻359頁)と、故郷に求めていた全ては不可能になったことを、峯雄は吐露せざるをえないのである。

その上で峯雄は、帰京し当分帰郷しないことを告げた後、「戦闘! そうだ戦闘こそ人の運命だ。たゞ夫れ戦闘それ自身が人の運命だ」(2巻359頁)と表明し、東京に戻っていく。従来この部分は離婚後の傷心から抜け出て「文学者としてまさに世と戦闘しよう」⁴⁴⁾としていた独歩の意志の表明、厳しい中でも自らの理想を追い求めようとする「現実の国木田哲夫の叫び」⁴⁵⁾として、過酷な東京の現実に苦悩する独歩の伝記的事実の反映として理解されてきた。

これらの結論は峯雄が棄郷することが前提となっている。しかし峯雄は「最早当分故郷には帰りません(傍線-引用者)」(2巻359頁)と言っており、二度と再びそこに帰らないとは言っていないのだ。帰郷定住に失敗しつつも、その後も故郷としての山口へは帰っている独歩と同じなのである。ではこの表明はどのように理解すべきなのだろうか。最後に静態的ではありえない故郷を、峯雄が戻る東京

と関係させつつ、『帰去来』を読む可能性を明らかにしたい。

おわりに 「連続」の中で生きるということ

前章で示された『帰去来』の帰省小説性の崩壊は、東京と地方との対立によって構成されていた理想の故郷像が、戦場、朝鮮、移民地という外部との具体的、想像力上の連続により崩壊するということを示すものであった。

その崩壊後に峯雄が帰っていくのが東京である。その東京は、松原岩五郎『最暗黒の東京』が「生活の戦争」⁴⁶⁾と、生存競争の比喩として「戦争」を使うように「戦闘」にあふれた都市であった。この生存競争にさらされたのが、「窮死」(『文芸倶楽部』13巻9号 1907・7・15)に、

「実際文公は自分が何処で生まれたのか全く知らない、親兄弟も有るのか無いのかすら知らない(中略)それから三十幾歳になるまで種々な労働に身を任せて、やはり以前の放浪生活を続けてきたのである。」(4巻32頁)

と描かれる、東京のいわゆる“スラム”等に流入する文公などの人々であった。その人々の大半は地方から流入する人々であったのだ。

また東京は日露戦争直後の日比谷暴動をみた華族に、

「(明治)三十七年から八年の中頃までは、通りすがりの赤の他人さ言葉をかけてみたいようであったのだが、今ではまた以前の赤の他人同士の往来になって『った』
「其処で自分は戦争でなく、外に何か、戦争の時のような心持に万人がなって暮らす方法はないかしらんと考えた」(「号外」『新古文林』2巻10号 1908・8・1 3巻471頁)

と、平時における「戦争の時のような心持」の必要性を想起させるような不可知の群衆の住む世界であった。この日比谷暴動に参加した人々は、先に見た文公などの人々と重なる、地方から流入した細民などでもあったのである⁴⁷⁾。

それらの人々が流入する東京は、例えば峯雄が故

郷を往来した鉄道や船舶によって地方と繋がり、また同時期に形成されつつあった船舶航路で朝鮮、台湾等とも繋がる場所でもあった。またそれは「二少女」(『国民之友』23巻371号 1898・7・10)の主人公が務める電話交換所に基づく電話などのネットワークなどによっても世界とつながっている場所であった。それらを促進しつつ、かつそれらに支えられる形で、本土と朝鮮、台湾との物的・人的つながりは、日清・日露戦争を経ることで既に切り離され得ないものになっていったのである⁴⁸⁾。

峯雄はいわゆる“スラム”の住人ではない。どちらかといえば群衆を眺めた華族と同じような立場にあったのだ。その華族が群衆に感じたのと同じように、峯雄も東京においては常に「驚き」を伴う生活を強いられるのである。その中では、「死」(『国民之友』22巻370号 1898・6・10)の地方出身の教師のように、「戦闘」に耐え切れず自殺を選択する場合もあった。

しかし「戦闘」を決意した峯雄にとって東京で生きるということは、「驚き」をもたらず人々と共に生き続けるということであった。また峯雄にとって帰郷が必ずしも否定されていないように、戦場・朝鮮・移民地・東京と「連続」する中での故郷は、東京と同じく「戦闘」の中にあった。その意味で峯雄が帰っていくのは単に東京という名を持つ場所ではなく、それらとの連関の中に存在することにより常に動かざるをえない世界であった。

つまり『帰去来』は、「土着と近代」の葛藤の物語との構図を設定して、土着＝地方・故郷という静態的でユートピア的な場所と近代＝都市を創出しようとする帰省小説とのみすることはできない。それは、静態的な場所は既に存在せず、イメージとしてもその新たな創出は不可能であり、朝鮮や台湾・移民地・東京・戦場とつながる動態的な世界でしか生きることは出来ないということの表明であった。『帰去来』は帰省小説に対立する反帰省小説でもあったのである。

このような反帰省小説は、その舞台となる世界を本土内だけでなく、朝鮮や台湾や移民先との関係を持つ中で成り立つものとして描くテキストであった。またそれはその中に生きる人々を近代に視点か

ら構造化しようとする「戦闘」の産物でもあった。

そのようなテキストを読むということとはどのような意味をもつのだろうか。1900年初頭に独歩を最初に評価した青年達は、独歩テキストの中の「寂しいという感情」を、自分たちのアイデンティティを保証するものとして読んでいったとされている⁴⁹⁾。この青年達の大半は地方在住者であり、1900年代以降において、本土内だけでなく中国・朝鮮や南方などへの様々な移動を強いられる人々でもあった。

青年達の多くは独歩のテキストから「他者を拒む」心性を受け取っていった。それは、「空知川の岸辺」(『青年界』1巻6・7号 1902・11・1～12・1)に描かれるような、アイヌのいない北海道を当たり前のものとして扱う心性や、「朝鮮を占領して我帝土に加うる事、而て漸次、満洲、西ベリヤ等に及ぼす事～支那は我貿易地たるに過ぎざる事」(『対外策』9巻298頁)と、朝鮮や中国を植民地や貿易対象としてしか考えない意識を共有することとなっていったと思われる。

例えば独歩の熱心な読者であり、代表的な研究者でもあった中島健蔵(1903～1979)は、独歩のテキストから「どのような場所においても、何ものかをとらえることができる」⁵⁰⁾ 感覚を受け取っている。これを受け取ることは、独歩の中の「他者を拒む」感覚を共有することであった。それは、「どのような場所」で出会う他者をも、非国民か自国民か・非日本人か日本人かという分類することで、自らの国民としての揺らぎを経ずに他者(「何ものか」)を認識させてしまうことであったのだ。その上で「どのような場所」においても、精神的な核となる新たな故郷が構想されることとなったのである。

確かに独歩のテキストからそれらの感覚を受け継ぐことは可能であり、多くの人々はそのように独歩を読んできた。しかし現在において独歩のテキストを読む場合、読み解かれるべきなのは、それらの要素と絡み合いながら提示されている反帰省小説性、そして「驚き」の感覚であろうと思われる。

グローバリゼーションの進展や様々なメディアの発達により、現代に生きる人々は、より様々な出会いを経験できるようになっている。しかし現在に生きる人々にとって、この拡大と揺らぎを不可知で理

解不能なものとして認識することは、独歩の時代よりも更に困難になっているのではないだろうか。爆発的に発達したメディアは、その状況を当たり前のこととして受けとめることをはるかに容易なものとしてしまっている。果たして峯雄や独歩が、朝鮮や中国や“スラム”の人々に対してもった「驚き」を、現代に生きる人々(それは私も含む)は感じる事が出来るのだろうか。その意味で、私を含む現代に生きる人々は、より巧妙に他者を排除する、強固な帰省小説的な世界に生きているといえるだろう。

そのような世界を構成する装置のひとつが、国民文学であり、それへの批評であった。人々は文学の読解を通じて、均質で排他的な読者共同体を構築していった。それは、他者のいない我々の世界と、他者のみのいる彼らの世界の分断を作り出していくことでもあったのだ。両者の安定的な併存を通じて、人々は帰省小説的な世界像を自らに内面化していったのである。この世界像の構築に抗するためにも、今日回復されなければならないのは「驚き」の感覚なのである。

(この論文は1999年度立命館大学国際関係研究科修士論文『移動中のテキスト—国木田独歩と移動する人々』を圧縮・改訂したものである。)

注

- 1) ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典』新曜社 1999
- 2) 西川長夫「国民文学の脱構築」57～59頁『国民国家論の射程—あるいは<国民>という怪物について—』柏書房 1998
- 3) 本稿ではB・アンダーソンの指摘する国民意識の重要な要素である「同時性」の形成に文学が果たした役割(白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体』50頁 NTT出版 1997 原著は1991)に基づき、国民文学を国民意識の形成に寄与する文学テキストとする。
- 4) 柄谷行人「ナショナリズムとしての文学」文学界 1991・1(後に『戦前の思考』文芸春秋 1994に改訂所収)
- 5) 西川前掲論文
- 6) 関井光男「日本近代文学研究の起源」日本文学 43巻3号1994・3
- 7) 『日本』6558号1907・10・1 国木田独歩全集1巻 528頁。なお本稿において国木田独歩のテキストの引用は

- 国木田独歩全集編纂委員会編『国木田独歩全集』[以後巻数と頁数を記すものはここからの引用を示す] (学習研究社 1963～1964) を用いた。また本稿の全ての引用において、旧漢字・旧仮名は基本的に新漢字・新仮名に改めた。
- 8) 西川長夫「帝国の形成と国民化」16～39頁 西川・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』新曜社 1999
- 9) 「続病榻雑話」『新声』18編5号 1908・4・1 1巻556頁
- 10) 「余と自然主義」上『日本』6558号 1907・10・14 1巻528頁
- 11) 「我は如何にして小説家となりしか」『新古文林』3巻1号 1907・1・1 1巻495頁
- 12) 塩田良平「『愛弟通信』解題」『愛弟通信』193頁 岩波書店・岩波文庫版 1940
- 13) 柄谷行人『日本近代文学の起源』24, 36～38頁 講談社・講談社学芸文庫版 1988初版は1980。
なお柄谷は「ナショナリズムとしての文学」において、B・アンダーソンの議論を引きながら、独歩を国民文学者の起源として、また「日本植民地主義の起源」(『ヒューモアとしての唯物論』335頁 講談社・講談社学術文庫版 1999) において、非国民を排除する文学テキストの祖として規定している。
- 14) 渡部直己『日本近代文学と〈差別〉』62頁 太田出版 1994
- 15) 柄谷の議論を発展させた加藤典洋は、この婆さんを変化を強いられる受動的な存在とみている(『日本風景論』169頁 講談社1990 初出は『群像』1989・1)。
- 16) 若月紫蘭『東京年中行事』I 196～198頁 平凡社東洋文庫 1968 初出は1911
- 17) 前田愛・加藤秀俊『明治メディア考』27～39頁 中央公論社 1980
- 18) 小金井市誌編さん委員会『小金井市誌』II 歴史編 449頁 小金井市 1970
- 19) 白雲子「自然派と『濤聲』」読売新聞10779号 1907・6・9 全集10巻393頁
- 20) 「芸苑偶語」『文庫』3巻6号 1907・8・15 10巻398頁
- 21) 山田博光「湖處子と独歩—婦省小説をめぐって」137頁(『国木田独歩論考』創世記 1978)
- 22) 北野昭彦「婦省小説の出現とその背景—宮崎湖處子『婦省』論」107 大谷女子大國文14 1984・3
なお婦省小説という枠組を前提とする研究を、これより婦省小説研究と呼ぶ。
- 23) 柄谷『日本近代文学の起源』97～126頁
- 24) 滝藤満義「様々な婦省—『婦去来』『河霧』『酒中日記』—」217頁『国木田独歩論』塙書房 1986
- 25) この主人公の状態は、それに続く婦省のために新橋駅に向かう途中に会う「前田」という「同国」の者との会話によっても示される。
- 26) 山田「湖處子と独歩—婦省小説をめぐって」144頁
- 27) 前田愛は「(『婦省』は—引用者) 自然村の現在を即時的に肯定する」として自然村が現存するように書かれたテキストであり、その主人公は「かつては共同体の内部の人間でありながら、現在は広い世界(都市—引用者)を知ってしまった外部の人間として遇される」とする。このように前田は「婦省」における故郷を文明的な都市と対立する未開的な自然村共同体として捉えている。(前田愛「明治二三年の桃源郷—柳田国男と宮崎湖處子の『婦省』」『前田愛著作集』第6巻 234～238頁 筑摩書房 1990 初出は1985) この図式は婦省小説研究における「土着と近代」の形と対応している。
- 28) 『民友社文学集』解題 明治文学全集36『民友社文学集』451～452頁 筑摩書房 1970
- 29) 成田龍一「『故郷』という物語」14～15頁 吉川弘文館 1998
- 30) 大石嘉一郎「地方自治」岩波講座『日本歴史』近代3 227頁 岩波書店 1962
- 31) 西川長夫「帝国の形成と国民化」西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』20頁 柏書房 1998
- 32) 小森陽一「近代読者論」121頁 岩波講座『現代社会学』第8巻 岩波書店 1996
- 33) 同上117～121頁
- 34) 小森陽一「『帝国』というネットワーク」川本皓嗣・小林康夫編『文学の方法』315頁 東京大学出版会 1996
- 35) 「同郷人とのシンパシー=同郷意識は、日清・日露戦争での同郷人による軍隊編成、それに戦闘と戦死における連帯意識の高揚を契機として、空間的な移動が社会的な規模で大きく出現した、この時代に起こりえたはずである」という1920年代についての川村邦光の指摘は、その前段階としての1890～1910年代においては同郷意識の形成が行われていたことを示すものであろう。(川村邦光『オトメの祈り』73頁 紀伊国屋書店 1993)
- 36) 「捕虜」(『軍事界』2年3号 1903・10・5) 3巻310頁
- 37) グリーンブラッドは「驚き」を、多様な両者の多様な関係性の中の経験として描くことで、「見なれた状態のために平板化してしまった驚き」(荒木正純訳『驚異と占有—新世界の驚き』41頁 みすず書房 1994)を回復し、近代=ヨーロッパ・未開=新世界という固定的な前提を排そうとする。本稿ではこのような見解を引き継ぎ、「驚き」を近代的な主人公による固定的な他者への反応とせず、多様な交通関係の中にいる主人公の多様な他者への関わりの痕跡として考えていきたい。
- 38) 前田愛「明治二三年の桃源郷—柳田国男と宮崎湖處子の『婦省』」243頁
- 39) 前田前掲論文 237頁
- 40) 「湖處子の『婦省』」(『改訂版 故郷七十年』所収)『定本柳田国男集』別巻3 212頁 筑摩書房1971)
- 41) 2巻351～352頁
- 42) 在朝日本人の数は、朝鮮半島の植民地化に伴い、1890年には5,589人であったものが1910年には126,168人に増加していった(『日本帝国統計年鑑』9巻71頁29巻91頁参照)。なおこの数字は管理体制不備による数字の不正確さが指摘されている。木村健二「在居留留民の社会活動」(岩波講座『近代日本と植民地』5巻 岩波書店 1993)は居留民数の推移を1890-7,245 1910-113,875としている。
- 43) 例えば朝鮮においては、1890年は男3,494人に対して

- 女は2.095人、1910年には男70.145人に対して女は56.023人であった。(『日本帝国統計年鑑』9・29巻 1890・1910 内閣統計局)
- 44) 滝藤前掲論文211頁
- 45) 北野昭彦「『婦去来』—「山林の自由の生活」と現実との衝突」132頁(『国木田独歩の文学』桜楓社 1974)
- 46) 『最暗黒の東京』7頁 岩波書店・岩波文庫版 1988 初版は1893
- 47) 松尾尊兌『大正デモクラシー』10頁 岩波書店 1974
- 48) 木村健二『近代日本の地方経済と朝鮮—1876年～1910年における—』『朝鮮問題』学習・研究シリーズ24『朝鮮問題』懇話会 1983
- 49) 飯田祐子「彼らの物語—『文章世界』における「寂しさ」の瀾漫—」日本近代文学59号 1998・10
- 50) 中島健蔵『国木田独歩論』明治文学全集66『国木田独歩集』346頁 筑摩書房 1974 初出は1949

主要参考文献

- B・アンダーソン『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』(白石さや・白石隆訳) NTT出版 1997 原著初版は1983 増補版は1991
- 飯田祐子「彼らの独歩—『文章世界』における「寂しさ」の瀾漫—」日本近代文学59 1998・10
- 井口和起編『日清・日露戦争』近代日本の軌跡3 吉川弘文館 1994
- 石井寛治『情報・通信の社会史』有斐閣 1994
- 石塚裕道・成田龍一『東京都の百年』山川出版社 1986
- 岩波講座近代日本と植民地第5巻 岩波書店 1993
- 岩波講座日本歴史16 近代3 岩波書店 1962(旧版)
- 岩波講座日本歴史16 近代3 岩波書店 1976(新版)
- 岩本由輝「故郷・離郷・異郷」岩波講座日本通史18巻 近代3 1994
- I・ウォーラスティン『世界経済の政治学—国家・運動・文明—』(田中治男・伊豫谷登士翁・内藤俊雄訳) 同文館出版 1991
- 加藤典洋『日本風景論』講談社 1990
- 加藤秀俊『増補改訂版 文化とコミュニケーション』思索社 1977
- 鹿野政直・山井正臣編『近代日本の統合と抵抗』I II 日本評論社 1982
- 神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店 1961
- 柄谷行人『日本近代文学の起源』講談社・講談社芸

文庫版 1988

- 「ナショナリズムとしての文学」(文学界 1991・1『戦前の思考』 文芸春秋社 1994 に改訂所収)
- 川村邦光『オトメの祈り』紀伊国屋書店 1993
- 北野昭彦『国木田独歩の文学』有精堂 1974
- 木股知史『イメージの近代文学誌』双文社出版 1988
- 木村健二『近代地方経済と朝鮮』『朝鮮問題』学習研究シリーズ』24『朝鮮』問題懇話会1983・12
- 金梵汀『関釜連絡船』朝日新聞社 1988
- S・グリーンブラット『驚異と占有 新世界の驚き』(荒木正純訳) みすず書房 1994 原著は1988
- 黒川創『国境』メタロゲ 1998
- 同編『〈外地〉の日本文学選』新宿書房 1996
- 児玉正昭『日本移民史研究序説』溪水社 1992
- 小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー』小沢書店 1997
- 酒井直樹『死産される日本語・日本人』新曜社 1996
- 坂本浩『国木田独歩』有精堂 1969
- 新保邦寛『独歩と藤村』有精堂 1996
- 豊田武・児玉幸多編『交通史』山川出版社 1970
- 中川清『日本の都市下層』勁草書房 1985
- 中村光夫『明治文学史』筑摩書房 1963
- 成田龍一『「故郷」という物語』吉川弘文館 1998
- 同編『都市と民衆』近代日本の軌跡 吉川弘文館 1993
- 西成彦『森のゲリラ 宮沢賢治』岩波書店 1998
- 西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房 1999
- 橋川文三責任担当『日本の百年』7 明治の栄光 筑摩書房 1962
- 平岡敏夫『短編作家国木田独歩』新典社 1983
- 廣岡治哉編『近代日本交通史』法政大学出版局 1987
- T・フジタニ「近代日本における権力のテクノロジー」思想845 1994・11
- 前田愛『都市空間の中の文学』筑摩書房・筑摩学芸文庫版 1992
- 『幻影の明治』朝日新聞社 1978
- 三橋修『明治のセクシャリティ』日本エディタースクール出版部 1998
- 森崎和江『からゆきさん』朝日新聞社 1976
- 吉田精一『自然主義文学の研究』上下 東京堂出版 1958
- 渡部直己『日本近代文学と「差別」』太田書店 1994
- 『歴史公論』5巻1号 特集近代百年と移民 1979・1